

英雄叙事詩の語り方「ハイラハ (ᠬᠠᠢᠷᠠᠬᠠ)」について

- アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩とエスニシティ -

上村 明

0 . はじめに

さまざまな芸能を民族全体の伝統的な芸能としてとらえなおし、国家統合の原動力としようとする試みが各地で行われている。今年8月6 - 9日、モンゴル国ウランバートルにおいてUNESCOの後援で開催された「中央(内陸)アジア英雄叙事詩国際シンポジウム・フェスティバル」(モンゴル科学技術教育文化省主催)もそのひとつといえる。研究発表のあとモンゴル国中から集められた英雄叙事詩の語り手たちが演奏を披露した。その中心にいたのが、アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り手アビルメド氏である。

民族主義的な観点は芸能の地方差や時代的背景を無視して「民族」を一様なものとし、見なしてしまう傾向がある。アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語りを通して、「モンゴル」という枠組みが形成されまた現に形成されつつあるという視点を提示したい。

1 . "ᠬᠠᠢᠷᠠᠬᠠ" とは何か? - 現代の語り手アビルメド氏 ᠠᠪᠢᠷᠮᠡᠳ(1935-) の解説 -

- 英雄叙事詩の仏教的権威づけ -

「"Хайлах" とは聞き手が語り手の言葉を聞き取りやすくするための語りの方である。」(K.A. Jul 1996)

* 仏の教えを聞き取りやすく語ることが "ᠬᠠᠢᠷᠠᠬᠠ" の目的である。

「英雄叙事詩は俗人のための経典である。僧でない俗人は経を理解できないから叙事詩によって仏の教えを知るのである。」(K.A. JUN.1996)

「英雄叙事詩は今から2千年前に起こった事実。英雄叙事詩は仏敵から郷土を守るその宗教的闘争を描いたもの。(Нарантуяа1975)

表 1 各叙事詩の効用

「強いもの」 (хатуу, догшин, хэцүү)		vs	「弱いもの」 (зөөлөн, номхон, амар)	
叙事詩の分類と名称			語る日数 どんな家で語るか (効用)	
a) 効き目の強い叙事詩			病人が出るなどの苦しみを あじわっている家	
1. Талын хар бодон	3 日			
2. Довон хар бөх (1 の一部)	1 日			
3. Бөх алтан нудрам	3 日		狼による家畜被害のある家	
4. Бужин даваа хаан	2 - 3 日		もめごとや犯罪に関係した家・ 人の土地に行きそこになじめない家	
b) 中間の叙事詩				
5. Эзэн улаан бодон(3 の一部)	1 日		叙事詩を敬う家、年に1度しか語らない	
c) 効き目の弱い叙事詩				
6. Баян цагаан өвгөн	2 日		家畜を失った貧しい家 (富裕のための叙事詩)	
7. Наран хаан хүвүүн	1 日		子どものない家	
8. Аргил цагаан өвгөн	1 日		新婚で子どもを望む家	

* 英雄叙事詩の主人公は仏である。

- 1 の叙事詩の主人公は "Гомбо" 仏である。("Гомбо" < T. "mgon-po", "Mahakala", C. 「大黒天」, J. 「大黒 (大国) 」 「富の神」, Getty, pp.160-162)
この叙事詩は干害や雪害の時にも語る。一度語れば 3 年間の害を遠ざけるとされる。"Дорж Зодов" (< T. "rdo-rje-gcod-pa", 「金剛經」) という経を一度読んだのと同じ功德がある。1 年に 3 度以上語ると命が縮む。(Нарантуяа 1975 from Авирмэд, Ховд)
5 の叙事詩の主人公は "Жамсран" 仏である。("Жамсран" < T. "lcam-sring" 「戦争の神、馬の守護者」, Getty, p.151)(Нарантуяа 1975)

* しかし、このような英雄叙事詩の仏教的体系づけが行われたのは比較的新しく、ボグト・ハーン政権時代の可能性が高い。

a) 1911 - 13 年、アルタイ・オリアンハイはモンゴル国 (活仏ボグド・ハーン政権) に帰属するとともに、ドゥルベト "Сайн заяат Дөрвөдийн баруун гарын Үнэн Зоригт хан аймаг" に編入された。そこでは語り手のほとんどが僧であり、叙事詩が仏教的に権威づけられていた。アルタイ・オリアンハイはその影響を受けたと考えられる。

"Хан харангуй" は "Яамандаг" 仏 ("Yamantaka" 「死の征服者」 T. "gshin-rje-gshed", C. 「閻曼德迦」 「文殊の化身」, Getty, p.164) である。"Дайнь хүрэл" は "Жамсран" 仏 この 5 人の英雄を "Лхам" 仏 (T. "lha-mo" T. "dpal-ldan-lha-mo", S. "Kaladevi", "Sri-devi" Getty, pp.149-150) が統率する。(Цолоо 1967 from Лхагваа, Увс)

b) 「アルタイ・オリアンハイの叙事詩の語り手たちは、ドゥルベトにあった書写された叙事詩を通じて叙事詩を学んだ」(Нарантуяа 1975)

c) 20 世紀前半活躍した語り手 Ш.Ачилдаа (1881-1959) は、父 Шавьцагаан とともに、叙事詩の語り手であると同時に僧であった。アルタイ・オリアンハイにはこの 2 人以外、僧でもあった叙事詩の語り手はいなかった。(K.A. JUL 1996) 叙事詩の仏教的体系づけには、この 2 人がかかわったのだろう。

d) モンゴル西部辺境のカザフ、オリアンハイでは、宗教活動が 38 年まで比較的自由だった。旧右翼大臣旗の "Дашчойнхорлин" 寺は 1938 年に閉鎖。

"(カザフの領主たちは、) зөвхөн 1936-37 онуудаддуган сүм 7-г шинээр байгуулж" (х.57 Минис, Сарай 1960)

e) ドゥルベドとアルタイ・オリアンハイでは叙事詩の語り方 (発声方法) に違いがある。ドゥルベドの叙事詩の語り方は "аяалах" であって、"хайлах" でない。(2,3)

2. 「喉歌」(throat singing, guttural singing) と「アルタイ (山) の主」信仰

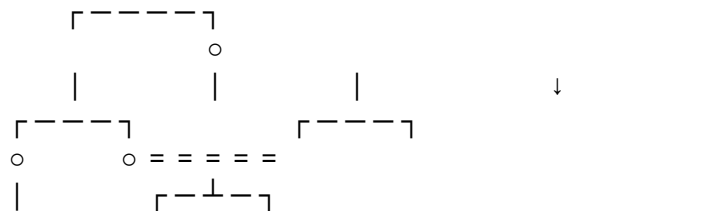
* 「ハイラハ」はモンゴルの他の地域の英雄叙事詩の語り方より、アルタイ山脈周辺のチュルク民族の語り方に近い。

	英雄叙事詩 (高音のないハミ)	ホーミー	ツォール (高音は笛で)	山の主	
アルタイ・オリアンハイ	тууль (名詞) хайлах (動詞)	хөөмий	цоор	алтайн эзэн	ツォールの伝説 叙事詩は「主」に捧げる
トゥバ	тоол	хөөмэй	шоор	даг ээзи	
アルタイ	кай		шоор	таг ээзи	アルタイ・オリアンハイに共通の ツォールの伝説の存在
シヨル	кай			таг ээзи	
ハカス	хай	хай		таг ээзи	アルタイ・オリアンハイに共通の ツォールの伝説の存在
カルムイク	ут тууль				
バシキール		uzlyau	kuray		

- * これらの民族では喉歌をめぐる伝説・儀礼に「山の主」が登場する。
- 喉歌は人間の姿をとる聖的な存在とのコミュニケーションの手段である。

3. 語り手の系譜と右翼大臣旗の構成

図 1 「アルタイ・オリアンハイ英雄叙事詩の語り手たちの系図」



Жилькэр(1858or59-1935)	Оорцог сум, хорхон элхэн
Дух	Оорцог сум
Б. Даш	одоогийн БӨ аймгийн Булган сум
С.Балдан(1910-?)	Ах сум
Шавцагаан Ачилдаа	Да ламын шавь нар
Цагааннохой(1880s-1920s)	?
Мухар гарын Бариул(1901-31)	?
Ш.Буян(1898-?)	?
Дамдин	Цэрвээ сум
С.Чойсүрэн(1911-79)	Цэрвээ сум
Даваан Чойрог	Цэрвээ сум
З.Рэнцэн(1913-80)	?
Г.Ширэндэв Г.Баатар(1903-46)	Цэрвээ сум
Б.Уртнасан(1927-) Б.Авирмэд(1935-)	

- * 語り手の系譜は ʌèëüéýð から始まる。
- * 語りの継承の多くは血縁による。
- * 語り手の多くはアルタイ・オリアンハイ旧右翼大臣旗のオールツォクかツェルベール・ソム人間。

オールツォク（鄂爾楚克）の右翼大臣旗帰属

A)

乾隆二十四年。秋、八月。甲甲。

諭定邊左副將軍成衮札布等、辦理新撫烏梁海事宜。

上諭軍機大臣曰。成衮札布奏稱、副都統莫尼扎卜等。招降察罕喀巴等處之卓特巴、博碩昆等五十七戶。伊等俱鄂爾楚克部落。原在阿爾台遊牧。以皮爲賦。應附入烏梁海大臣管轄等語。卓特巴授爲章京。巴彥授爲驍騎校。所屬二十九戶。歸內大臣察達克管轄。博碩昆授爲章京。雅爾里克授爲驍騎校。所屬二十八戶。歸散秩大臣圖布慎管轄。

『平定準噶爾方略』正編卷七十六、十七 - 十八葉

B) 後十二鄂拓克。

...

特楞古特。四宰桑、人四千戸、鄂爾楚克。一宰桑、人五百戸、烏爾罕濟蘭。一宰桑、人八百戸、爲一鄂拓克。

『欽皇輿西域圖志』官制一、卷二十九、五葉

* オ - ルツォクはツァガーン・ハバ川の辺りにいて清朝に降った集団。アルタイ山脈で遊牧をしていた。

* オ - ルツォクはジュンガルの中ではテレングートとひとつのオトクであった。

* テレングートはテルートとならび、アルタン・ノール・オリアンハイ部の構成部分。現在のロシア・アルタイ共和国の住民の祖先。

* トゥバ (旧唐奴烏梁海) のケムチク旗にも *îîðæàê* ソムがあった。

右翼大臣旗の構成

A) アハ・ソム (*Äö ñóì*): 「旗全体を統治指導するソム」「よそ者たちのソム」

主な氏 (элкэн): холдон, хойд, орьяс, харчин, дөрвөд, бүрд, заамад, зуун-наст

B) ミヤンガト・ソム (*Ì ýíää ñóì*): 「旗の事務を司る役人たちのソム」

氏 (элкэн): хасаг арван, баян-өлзий арван, шар дархад, хар дархад, хоо дархад, эмч

C) オールツォク・ソム (*Î îðöîä ñóì*): 「一般牧民のソム」

氏 (элкэн): хорхон, нүцгэд, төнхөн шагз, саяван арван, бөдөөн арван, улаан, бүлээн, буриад

D) ツェルベー・ソム (*Öýðäýý ñóì*): 「一般牧民のソム」

氏 (элкэн): шажин, бурга

* ソムは規範的に外婚集団。

* エスニシティの変化

a) ハルハによる管理 → アルタイ・オリアンハイ七旗全体のハルハ化 (cf. ムニジャブ)

b) アハ・ソムへの他の部からの流入 → 右翼大臣旗のオイラト化

c) オールツォク・ソムの変化 (ボグト・ハーン時代のバガ・ラマタン)

4. まとめ

* アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩はモンゴル語で語られるが、音楽的には現在のアルタイ山脈周辺のチュルク系民族の英雄叙事詩の語り方と共通し (直川 1993)、モンゴルのほかの集団とはことなる。

* アルタイ・オリアンハイとそれら民族とのつながりは、歴史資料によってある程度まで跡づけることができる。

* モンゴルが清朝からの独立国の建設を目指したボグド・ハーン政権の時代、アルタイ・オリアンハイの語り手たちは、仏教的体系化をすることで国家の要請にこたえようとした。

5. おわりに

アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の変化を、「チュルク系集団のモンゴル化」という単純な枠組みで見ることにはできない。それが言語的な予見をとまなっているときはなおさらである。英雄叙事詩の語りを継承してきた「オールツォク」という集団がチュルク系言語を話していたか、モンゴル系言語を話していたか、二言語使用者であったか、また集団の中でも違いがあったかを明らかにできないからである。言語によってエスニックを区別しようとするれば、それは現代の国家・民族のあり様を過去に投影してしまうことになる。(オリアンハイの例から見ると清朝は言語よりむしろ生業 (税) をエスニシティ区別の基準として優先させていたのではないだろうか?)

資料・文献

- P. Нарантуяа, 1975, Монгол科学アカデミー言語文学研究所所蔵口承文芸資料（ホブド、バヤンウルギー両アイマクでの調査報告）5-48.
- Ж. Цолоо, 1967. Монгол科学アカデミー言語文学研究所所蔵口承文芸資料（ウブス、バヤンウルギー両アイマクでの調査報告）5-12-7.
- 『欽皇輿西域圖志』（1782年刊）
- 『平定準噶爾方略』（1772年完）
- Бадамхатан, С., И. Лхагвасүрэн. 1996, Алтайн урианхай, *ᠪᠠᠳᠠᠮᠬᠠᠲᠤ ᠰᠡᠭᠦᠷᠢᠨ ᠤᠷᠢᠶ᠋ᠠᠩᠬᠠᠢ*, 2 *ᠠᠶᠢᠳᠤ*, УБ.
- Владимирцов, Б. Я., 1923, *ᠪᠯᠠᠳᠢᠮᠢᠷᠴᠣᠪ ᠪᠤᠶ᠋ᠠᠨ ᠵᠢᠨᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠤᠷᠢᠶ᠋ᠠᠩᠬᠠᠢ*, Петербург-М.
- Гонгор, Д., *ᠭᠣᠩᠭᠣᠷ ᠳᠠᠭᠤ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠤᠷᠢᠶ᠋ᠠᠩᠬᠠᠢ*, SH T3F10.УБ.
- Гребнев, Л. В., 1960, *ᠭᠢᠷᠢᠨᠢᠭᠤᠨ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠤᠷᠢᠶ᠋ᠠᠩᠬᠠᠢ*, М.
- Грумм-Гржимайло, Г. Е., 1926, *ᠭᠦᠷᠦᠮ᠎ᠠ ᠭᠢᠷᠵᠢᠮᠠᠢᠯᠠ ᠭᠡᠷᠦᠭᠡ ᠠᠨᠠᠭᠤᠨ ᠤᠷᠢᠶ᠋ᠠᠩᠬᠠᠢ*, Т. III, вып. 1, Л.
- Золбаяр, Г., 1996, Тува-малчин, *ᠵᠣᠯᠪᠠᠶᠠᠷ ᠭᠡᠮᠠᠯᠴᠢᠨ*, 3 *ᠠᠶᠢᠳᠤ*, УБ.
- Катуу, Б., 1996, *ᠠᠠᠳᠠᠭᠠᠨ ᠠᠳᠠᠭᠠᠨ ᠠᠳᠠᠭᠠᠨ*, УБ.
- Минис, А., А. Сарай, 1960, *ᠮᠢᠨᠢᠰ ᠠᠰᠠᠷᠠᠢ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*.
- Моисеев, В. А., 1983, *ᠮᠣᠢᠰᠡᠭᠡᠪ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, XVIII а., М.
- Нарантуяа, Р., 1987, Урианхай туульс, SF T.IV F.2, УБ.
- ᠨᠠᠷᠠᠨᠲᠤᠶ᠋ᠠᠭᠠ ᠲᠤᠭᠤᠯᠢᠰ*, 1994, М.
- Нямбуу, Х., 1992, *ᠨᠢᠶ᠋ᠮᠪᠤᠭᠤ ᠬᠤᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, УБ.
- Очир, А. 1993. *ᠣᠴᠢᠷ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*. УБ.
- Потанин, Г. Н., 1948, *ᠫᠣᠲᠠᠨᠢᠨ ᠭᠡᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, М.
- Потапов, Л. П., 1948, *ᠫᠣᠲᠠᠫᠤ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Новоцибирск
- , 1969, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, М.
- Пунцагдорж, Б. (эмх.), 1990, *ᠫᠤᠨᠴᠠᠭᠳᠣᠷᠵᠢ ᠪᠤᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Олгий
- Сагалаев, А. М., 1984, *ᠰᠠᠭᠠᠯᠠᠭᠡᠪ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Новоцибирск
- , 1992, *ᠰᠠᠭᠠᠯᠠᠭᠡᠪ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Новоцибирск
- Туяабаатар, Лха., 1995, *ᠲᠤᠶᠠᠸᠠᠪᠠᠭᠠᠲᠤᠷ ᠬᠤᠭᠠᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*
- ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Олгий
- Хорлоо, П., 1975, *ᠬᠣᠷᠯᠣᠭᠤ ᠫᠤᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, УБ.
- Цолоо Ж. (эмх.), 1982, *ᠴᠣᠯᠣᠭᠤ ᠵᠡᠭᠡᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, УБ.
- , У. Загдсүрэн (хэвлэлд бэлтгэсэн), 1966, Баруун монголын баатарлаг туульс, SF T.IV F.2, УБ.
- Цэрэл, Б., 1997, *ᠴᠡᠷᠡᠯ ᠪᠤᠨᠠᠭᠤᠨ ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, *ᠠᠶᠢᠨᠠᠭᠤᠨ*, Увс-УБ.
- Forsyth, J., 1992, *A History of the Peoples of Siberia*, Cambridge Univ. Press
- Getty, A., 1988(rep.), *The Gods of Northern Buddhism*, Dover
- Katarbek, I., 1988, Qöke mončay tuuli-yin tuqai, Öbür mongγul-un yeke surγayuli erdem sinjilegen-ü sedgül, gün uqayan neyigem-ün sinjilekü uqayan-u mongγul keblel, 1988:2(内蒙古大学学报)
- 吐娜 1987「阿勒泰烏梁海七旗的分布及其盟旗組織」『衛拉特史論文集』新疆師範大学学報專号
- 馮翊時 1987「新疆吉薩爾懸蒙古族歷史概述」『衛拉特史論文集』新疆師範大学学報專号
- 何星亮 1986「阿勒泰烏梁海社会之印及其有關問題」『中央民族学院学报』（1986:4）
- 1988「阿勒泰烏梁海社会歴史述略」『中央民族学院学报』（1988:1）
- 森田稔 1996「中央アジア・北アジア」『アジア音楽史』第6章、音楽の友社
- 中野純 1993『日本人の鳴き声』NTT出版
- 直川礼緒 1993、“アジア中央部の喉歌と楽器”、『口琴ジャーナル』7

ゾーヤ キルギス 1993、" トゥヴァのホーミーの起源"、『口琴ジャーナル』7
音声サンプル

1) アルタイ・オリアンハイの英雄叙事詩の語り

‘Qar Kōkōl Baatar(Le Héros à la tresse de cheveux noirs)’ interprété par Q.Sesser (chant et topshuur) in "Mongolie: Chants kazakh et tradition épique de l'Ouest", OCORA Radio France, 1993 (Enregistrements effectués en octobre 1984 et août 1990, en mongolie, par Alain Desjacques)

2) ドウルベトの英雄叙事詩の語り 1

“Хаашаа дашаа морьтой Хаан цэргийн баатар”, Ц.Зодов(1910-86), recorded in Ulaangom, Uvs, Mongolia, 1980, モンゴル科学アカデミー言語文学研究所蔵テープ (2172/577-1-1)

3) ドウルベトの英雄叙事詩の語り 2

"Дуутай мөндөр хаан", Г.Хайнзан (1915-?), recorded in Ulaangom, Uvs, Mongolia, 1979. モンゴル科学アカデミー言語文学研究所蔵テープ(2008/543-1,2-1)

4) ショルの英雄叙事詩の語り (kaï)

‘Ahltyn Zaltyn’(Golden Wind), Mikhaïl Kauchakov, recorded by P.Simonin and P.Bois in JUN 1991. “Chants Épiques et Diphoniques, Asie centrale, Sibérie / Touva, Chor, Kalmouk, Tadjik Vol. 1”, 1996, INÉDIT

5) アルタイの英雄叙事詩の語り

‘Maaday Kara’, Aleksey Kalkin, vocal and topshuur, recorded in 1972 by Radio Moscow. “Uzlyau, Guttural singing of the peoples of the Sayan, Altai, and Ural Mountains”, 1993, PAN2019

6) カルムイクの英雄叙事詩の語り

‘Jangar’, Цагаан-Зам(1957-), recorded by P.Simonin and P.Bois in Jun. 1991. “Chants Épiques et Diphoniques, Asie centrale, Sibérie / Touva, Chor, Kalmouk, Tadjik Vol. 1”, 1996, INÉDIT

7) アルタイ賛歌

‘Altain magtaal’, Nanjid Sengedorj, recorded by Chris Johnston in Xovd City on 18 SEP 1994. “Jargalant Altai, Xöömii and other vocal and instrumental music from Mongolia”, 1996, PAN2050

8) モンゴル・ホーミー

‘Medley of xöömii styles’, Nanjid Sengedorj, recorded by Chris Johnston in Xovd City on 18 SEP 1994. “Jargalant Altai, Xöömii and other vocal and instrumental music from Mongolia”, 1996, PAN2050

9) トゥバ・ホーメイ

‘Khöömii’, Toumat, recorded by J.Gonçalvès in Dec. 1983. “Chants Épiques et Diphoniques, Asie centrale, Sibérie / Touva, Chor, Kalmouk, Tadjik Vol. 1”, 1996, INÉDIT

10) バシキールの U z l y a u

‘Uzlyau’, Mansur Uzanbayev from the village of Akyar, district of Haybulla, Bashkiria. “Uzylau, Guttural singing of the peoples of the Sayan, Altai, and Ural Mountains”, 1993, PAN2019

11) 笛の一種ツォールの演奏

П.Наранцогт(Чухай)(1921-), "Ээвийн гол (Ehv River)", "Жороо морины явдал (Walk of an Ambler)", recorded by Kamimura Akira in Duut, Hovd, Mongolia, Aug. 5 1995.

12) バシキールの K u r a y

‘Soldier’s March’, Azat Aitkulov from Ufa, Bashkiria. “Uzylau, Guttural singing of the peoples of the Sayan, Altai, and Ural Mountains”, 1993, PAN2019

表 2 「アルタイ・オリアンハイ七旗構成」

左翼

Зүүн амбаны хошуу 「左翼大臣旗」
itegemjitü güng(beyise) ガルサンジャブ (γalsangjab)
(左翼散秩大臣職は道光 22 年～、参領唐嘎祿...姜岱(輔国公) - 太平(鎮国公)(cf.張 p.963))
Мээрэнгийн хошуу 「副都統(meyiren)旗」
jïdgültü beyise ツァガーンビリグ (čaγangbilig)
Цагаан(Ак) соёны хошуу 「白ソヨン旗」
eyetei güng トウルバト (törübatu)
Хар(Улаан) соёны хошуу 「黒(赤)ソヨン旗」
joriγtu güng Сандонджаб (sangdungjab)

右翼

Баруун амбаны хошуу 「右翼大臣旗」
darqan beyise Балдандорж (baldangdorji)
Хөх мончогийн (Шар даагийн) хошуу 「フフ・モンチョク(シャル・ダー)旗」
yosutu güng Очилджаб (včirjab)
Дөнхөр хошуу 「ドUNKル旗」
sarayul güng Гонбоджаб (γombujab)

資料 1 「ツォール、トブショールの発生起原伝説」

A) ツォール発生伝説

Эрт урьдын цагт Ээвийн голын хөвөөнд нэг өнчин хүүхэд газар ухаж жимс ногоо олж иддэг байжээ. Тийнхүү нэгэн өдөр газар ухаж байтал нэг гоё хүүхэн (Алтайн эзэн) ирээд чи одоо газар малтахыг боль. Би чамд нэг мод өгье. Чи тэр модоор дуу гаргаж хоолоо олж ид гэжээ. Тэгээд Зараат гэдэг мод өгөөд явсан аж. Үүнээс цуур үүссэн байна.

(Recorded by K.A. from Narantsogt in Duut sum, Hovd aimag on Aug 5, 1995)

B) ツォールとアルタイの主の伝説

Хоёр хүн анд морджээ. Гэтэл ер ан тааралдсангүй, болжмор ч атугай алж идэж чадсангүй гэнэ. Тийнхүү хоолгүй болоод өлсөөд явж байж. Тэр хоёр хүний нэг нь далдын юм үздэг, нөгөө нь юм үздэггүй харин цуур үлээдэг хүн байсан байна. Гэтэл нэг орой юм үздэг хүн хэлжээ: “Чи цуураа үлээ. Маргааш ан алагдаж магадгүй” гэжээ. Тэгээд тэр орой цуураа үлээжээ.

Ингээд алтайгаа магтаж байтал алтайн эзэн савдгууд бүгдээрээ тэр хүнийг шавж суужээ. Тэр үед Алтайн нэг эзэн багталцахгүй, цуур үлээгч хүний хамар дээр нь сууж байгаад хальтирсан байна. Үүнийг хараад далдын юм үздэг хүн инээжээ. Гэтэл цуур үлээж байсан хүн уурлаад үлээхээ больчихож гэнэ. Алтайн эздийн толгойлогч хальтирсан тэр нэгэнд чамаас болж Алтайн магтаал сонсож чадсангүй, Чиний ганц дайртай хар бугыг эдэнд өгнө гэжээ.

Маргааш өглөө тэр хоёр анд яваад нэг том буга алжээ. Тэр нь унаж байсан учир дайртай байжээ. Ингээд “Алтайн урам” гэж дахиад цуурдсан байна.

(Recorded by K.A. from Narantsogt in Duut sum, Hovd aimag on Aug 6, 1995)

C) トブショール発生の伝説

Эрт дээр цагт нэг ядуу анчин, үзмэрч анчин хоёр хамт гөрөөлөхөөр явж байжээ. Олон хоног хоол ундгүй хоосон зэлмүүн ан хараад нэг ч юм тааралдсангүй гэнэ.

Тэгээд нэг орой хоногийн газар таарч, үзмэрч нь нөгөө анчиндаа “За чи, Алтай дэлхийгээ нэг сайхан баясгаж өг. Уул усны эзэд баясдийм гэлээ. Тэгвэл Алтай дэлхий чи бид хоёрт хишгээ хайрлах юу магад” гэж хэлдэг юм байж. За зуу бололцоод хоёулаа эртхэн нэг сайхан уулын бэлд бууж, цай ундаа хийж уугаад, хэвтэж амарсны дараа анчин хүн маань Алтайгаа хайлж гарч дээ.

Алтай хайлж гарахтай зэрэг Алтайн шивдэг савдаг хүний нүдэнд үзэгдэх олон амьтас цуглан ирж, тэр Алтай хайлсан хүний өвдөг өөд авираад хормой хот, ээм дал, энгэр цээж, толгой эхгүй, тойрон сууж чагнасан гэнэ. Хамар, нүд амгүй багтаж ядан сууж байтал хамгийн сүүлдхэн нэг таяг тулсан доголон чавганц хүрч ирээд суудаг газаргүй болохоор уруул өөд нь зүтгэж байгаад халтираад уначихжээ. Халтираад уначихлаар тэр Алтай хайлж байсан хүний уруул нь аяндаа товшигдож нэг жаахан өөр авиа гарсан байна. Энүүгийн нь хараад суужайгаад үзмэрчин хүн нь инээчихдээр Алтай хайлж суусан хүн нь уурлаж, “Эзгүй хээр хоёулахнаа ядарч зүдэрч яваа байж, нэгийгээ тохуурхаж, дооглолоо гэнэ ээ. Би юу хэлчихэв, яачихав. Надаар элэг наадам хийх гэж хэлүүлсэн юм байна” гээд Алтай хайлахаа больчихсон гэнэ. Ингэхтэй зэрэг нөгөө Алтайн эзэд олон амьтас хоорондоо маргалдаж, тэр шивдэг савдагийн ахлаач ноён бололтой нэг нь өнөөх доголон чавганцад, “Чамаас болоод энэ сайхан Алтайн магтаал сонсож чадсангүй таслуулчихлаа. Сүүлдэж ирэх мөртөө хүний ам хамар дээр ч гараад суучихаж чадалгүй халтирч унаад, тэрнээс үзмэрчин хүү инээгээд ийм болчихлоо. Ерөөсөө чиний ганц дайртай хар цары чинь маргааш энэ хоёр анчинд өгөөд явуулна даа” гэж загнаад тараад л суудаг юм байж.

Тэгээд “За туульчин гуай битгий уурла. Би хэв хэрэгтэй юмнаас болоод инээчихлээ. Маргааш учир явдлаа ярья даа. Одоо зүгээр тавтай унтаж амарцгаая” гээд ямар ч байсан маргааш олз омогтой явах юм байна гэж бодоод чимээгүйхэн унтаад өгч гэнэ.

Унтаж хоночихоод маргааш өглөө нь босоод урьд хөтөл дээр гартал нуруу нь дайртай, эвэр нь хугархай хүрэн буга таарч гэнэ. түүгээ алж ангийнхаа олзыг хувааж авснаас хойш үзмэрчин хэлж дээ. “Өчигдөр орой онцын ч юм болоогүй. Ингээд Алтайн шивдэг савдаг тууль сонсох гэж цуглараад байтал хамгийн сүүлд нэг доголон чавганц хождож ирээд уруул дээрээс чинь халтирч унаснаас болоод би инээчихсэн юм. Харин та нэг товших хөгжимтэй хайлбал тууль их сайхан болмоор юм билээ. Би танд товших, хөгжим хийж өгье” гэлцээд шар харгайн даланг ухаж, хоёр чих гаргаад мориныхоо сүүлээр хялгаслаад, уул агнасан ангийн толгойг дуурайлган сийлж суулгасан гэдэг юм.

(Туяабаатар1995,pp.51-52)

資料2 ムニジャブ(莫尼扎ト)について

A) ハルハの副都統、オリアンハイの管理

olan_a ergügdegsen—ü qoyaduyar on(1912)—du dayar—a iregsen
dörbed—ün sayin jayayatu jägün yar—un batu irügeltü tegüs köllüg
dalai qan ayimay—un jasay wang güng_üd—ün šastar—un qoriyangyui.

tabuduyar

dörbed—ün barayun yar—un ünen joriytu qan ayimay—dur qabsuraysan
itegemjitü jasag ulus—tur tusalayči güng načuydorji, uy ebüge
ijayur—un tüšmel bayiyuluysan čadag(察達克), čing ulus—un tegri—yin tedgügsen—ü
qoriduyar on—dur dotuyadu sayid—un tusiyal—dur toqun talbijuqui.
yučin qoyaduyar on—du ügei boljuqui.

angq-a uday-a čadag-yin kübegün tasqal-i sula sayid talbižuqai.
tegri-yin tedgügsen-ü qorin tabuduyar on-du, urivangqai-yi jakiraqu
qalq a-yin mevirin-ü janggi mönijab(莫尼札布)-luγ_a kerülden jangčildaysan učir-a
bayilyajuqai.

”jarliy-iyar toytayaysan mongyol ulus-un šastar-un naimaduyar debter””

モンゴル国立中央図書館蔵

(“Зарлигаар тогтоосон монгол улсын шастирын хураангуй”I,II,1997,УБ.)

B) 税・俸禄の管理

乾隆二十二年。冬、十月。乙丑。

諭定邊左副將軍策布登札布、辦理新撫烏梁海事宜。

上諭軍機大臣曰。．．．從前伊等每戶原納準噶爾貂鼠六個。後經減二交四。今著加恩止納二貂。俱交與莫尼扎卜傳諭。併計其戶口若干。應納貂鼠若干。呈報具奏。其察達克管屬下。既俱納賦。則伊等亦應給俸亦交莫尼扎卜查辦按其品級。照內地官員。減半支給。從前辦理烏梁海事務。專委策布登札布、今著車木楚登札布。一同管理。前令伊回遊牧休息。今既同察達克等、辦理烏梁海博和勒等事。自應奮勉前往効力。竣事之後。再回遊牧。

『平定準噶爾方略』正編卷四十四、三十九 - 四十葉

C) オリアンハイ征服に功

乾隆二十三年。春、正月。戊申。

命賞副都統職銜莫尼扎卜食俸。

上諭軍機大臣曰。．．．莫尼扎卜、招服烏梁海。頗知奮勉。．．．著賞給副都統俸。以示獎勵。

『平定準噶爾方略』正編卷四十九、一 - 二葉

D) オリアンハイ事情に精通

乾隆二十三年。春、二月。乙亥。

署定邊左副將軍納穆札爾、疏奏定議烏梁海爵祿貢賦等事宜。

納穆札爾奏言。．．．又據車木楚克札布告稱、奉上曰管理烏梁海事務。一應催科詞訟。必須諳練之員。副都統莫尼扎卜、深悉烏梁海情形。可否令其協辦事務。．．．

『平定準噶爾方略』正編卷五十、二十三葉

E) タンヌ・オリアンハイ(唐奴烏梁海)管理を任される。

乾隆二十七年。五月。乙卯。

議鑄給札喀沁、烏梁海部落印信等事宜。

定邊左副將軍成衮札布等奏言。現在札喀沁等一旗。阿爾台烏梁海七旗。唐奴烏梁海四旗。各安耕牧。俱在卡倫以外。雖各有總管。未經頒給印信。一切出入行走。殊多不便。查從前都爾伯特汗、王、札薩克等請給印信。臣等具奏。蒙恩頒發。謹援例示代請一體賞給。其唐奴烏梁海等尚未韻習事體。所給印信。或暫交副都統莫尼扎卜掌管。．．．

『平定準噶爾方略』續編卷十七、六葉

F) ポズドニエフの記述の誤り

ポズドニエフ1908『蒙古及び蒙古人』(東亞同文會訳)476ページ

A.M.Pozdoneyev, (tr. from Russian by J.R.Shaw and D.Plank), 1971, Mongolia and the Mongols Vol. 1, Indiana Univ.p.241

「行政上の関撃に於いては、此烏梁海人七ホシュン(旗)に区分せられ、二名のアムバン(長官)四名のダー及び一名のメーレニ之を管理す、メーレニは舊に己のホシュンのみならず、七ホシュンの首長と見做さる。往昔、ソイン人喀爾喀の台吉一名を招聘して、管理の任に當たらしめたり、之をソイン即ち烏梁海メーレニ族の祖とす。」

地図 2 「口琴ジャーナルNo. 7」1993、5 ページより

